
最後の輪廻

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の輪廻

【Nコード】

N6331Y

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

誰かから私は逃げていた。でも、何も覚えていない。気がつくときは記憶を失っていた。誰から逃げていたの？そして、目の前に現れた男の人は、いったい誰？！サスペンスのような、SFのような、恋愛小説、お楽しみください。

第1話 記憶喪失

私は逃げていた。オフィスビルの立ち並ぶ夜の街を。
必死で逃げていた…。

殺される。

逃げないと…。

早く、ここから逃げないと…。

必死で私は走っていた。

誰か、助けて！でも、誰に助けを求めていいかもわからないまま、
ただひたすら走っていた。

夜の街は静かだった。辺りには私の足音しか聞こえない。休日の
オフィス街の夜。どのビルも明かりが消え、閑散としている。

はあ。はあ。

息が切れ、足はパンパンだった。

もう走れない。そんな余力もない。喉はカラカラで、心臓はバク
バクだ。

はあ。はあ。

無意識に私は上着のポケットに手を入れた。そこには、なぜか飴
玉が入っていた。

私は飴の包みを震える手でどうにかあけ、飴を口に放り込んだ。

それからまた、歩き出した。

一步、また一步。壁に手を当て、どうにか前に進んだ。

足の裏がじんじんとしびれ、もう一步も歩けないくらいになって

いる。それでも私は歩いた。

はあ。苦しい。でも止まれない。きつと追って来る。私を殺すまで追って来る…。

私は気がつくど、高層マンションが立ち並ぶ街の中にいた。街燈がいくつもあるが、外には誰の姿も見当たらなかった。

腕時計を見ると、9時を過ぎていた。ここの住人達はすでに、みんな家の中に入っているのか。

カッソ…。カッソ…。

私の靴の音がやたらと当たりに響くので、私はそこで靴を脱いだ。パンプスを拾い上げ、上着のポケットに押し込み、また私は歩き出した。

高層マンションを見上げた。いったい、何階まであるのだろうか。どのマンションもものすごく高い。

見上げたマンションの上に夜空が広がっているが、ただただ真黒なだけで、星も月も出ていなかった。

あたりはすごく静かだった。人の声も、車の音も、なにも聞こえない。

夜は一気に冷え込むのか、吐く息が白かった。

風は全く吹いていなくて、ただその辺りを包む空気がやたらと冷たく感じた。

カッソ…。

その時、静けさの中に靴の音が鳴り響いた。

ドキ！誰かいる。

パンプスの音ではなく、男物の靴の音だ。それも聞き覚えがある。私はゾクツと寒気を感じた。あの男だ！

また私は走り出した。

必死で走り、すぐ近くの高層マンションの門をくぐった。

エントランスの自動ドアが開いてくれるかどうか、ものすごく不安だった。

ピカピカに磨かれた大きなガラスの自動ドア。その前に立つと、自動ドアはスウツと静かな音を立て開いてくれた。

良かった。胸をなでおろし、マンションのロビーに入った。広々としたロビーは大理石できていた。床は私の影をしっかりと映すくらい、綺麗に磨かれている。

煌々と明かりのついたロビーには、黒い革張りのソファアが置かれていた。ああ、座りたい。でも、休んでなんていられない。

ロビーの奥へと足を進めると、管理人室があった。だがその中は真っ暗だった。

私はロビーからマンションの廊下へと、必死で向かった。

はあ、はあ…。

息が切れる。足の裏が痛い。そして大理石の床は冷たかった。

それでも必死で私は足を動かした。

その時、靴が私の上着のポケットから落っこちた。慌てて拾おうとしたが、エントランスの前を人影が動いたので、私は慌てて身を

隠した。

ドキン。ドキン。

お願い。こっちにこないで！

人影はエントランスの前から消えた。

良かった！気づかれずに済んだ。

また私は歩き出した。

まっすぐに続くマンションの廊下を、ただひたすら前に進んだ。

廊下は電気がついていて明るかった。だが、どの部屋も明かりが漏れている部屋はなく、真っ暗だ。

そのうえ、あたりは静まり返っていた。聞こえてくるのは、私の「はあ、はあ」という息の漏れる音だけだ。

「あ…」

私は一つだけ、微かに窓から漏れる明かりを見つけた。あそこに誰かがいるかもしれない。

助けを求められるかもしれないと、ひたすら祈る気持ちで私はその部屋へと必死で歩いて行った。

助けを求めたら、警察に連絡してくれるかもしれない。そしてあいつを捕まえてもらって…。

でも、あいつって、誰？

それに、なんで私はここにいるの？

そして、ここはいったいどこなの？

…私は、いつたい、誰なの…？。

ドアのチャイムを鳴らそうとしてから、私の指は止まった。殺される。逃げないと殺される。だけど、いったい誰から私は逃げているの？

どうして？なんで覚えていないの？

何も、何も私は覚えていない！いったい、どうして？！

ピンポン…。震える指でチャイムを押した。だけど、返答はなかった。

「すみません。誰かいませんか？」

私はドアを静かに叩いた。あんまり大きな音を立てて、あいつに聞こえたらここにいるのがばれてしまう。

だけど、あいつって誰なの？なんで私は追われていて、どうして何も覚えていないの？

誰も出てくる気配がなくて、私はそっとドアノブを掴んでみた。ガチャリ。ドアノブが動いた。鍵はかかっていたいなかった。

そっとドアを開け、中を覗いた。

玄関の床はやはり大理石でできている。そこには一つも靴がなく、中はしんと静まり返っている。だけど、電気だけが煌々とついている。

「誰かいませんか？」

小声で聞いた。だが、やはり返答はなかった。

ゾク…。誰もいないんだ。ここ、無人なんだ。

背筋がゾツとしてきて、私はドアを閉めた。

このマンション、そういえばすごく綺麗だ。まだ建ったばかりのマンションかもしれない。だとしたら、ここには住人はいないのかもしれない。

私はまた廊下を歩いた。いったい、これからどうしたらいいのだろう。

マンションの一階の奥まで歩き、行き止まりで私は止まった。

ここから出たら、またあいつに出くわしてしまうかもしれない。

ここにいても、いつか見つかってしまうかもしれない。

だけど、闇雲に歩き回っているよりもまだ。

さっきの部屋に戻るのか。あそこならドアが開いていた。中に入
って鍵をかけ、電気を消して静かにしていたら、見つからずにすむ
んじゃないのか。

シュー…。

微かにエントランスの自動ドアが開いた音がした。

ドキン。まさか、あいつ？

カッーン。カッーン。

男物の靴音が廊下に響いた。

あいつだ。こっちに来る！

ああ。あれだ。ポケットから落ちた私のパンプス。あれを見つけ
てしまったんだ。取りに戻ればよかった。だが、それも後の祭りだ。

私はその場から、影になっている廊下の溝へと移動した。もう隠

れるところはそこしかなかった。

ドキン。ドキン。ドキン。

心臓がどんどん、早く鳴りだした。

カッーン…。

カッーン…。

どんどん、足音は大きくなっていく。

ああ…。なんで私は追われているんだろう。いったい、相手はどんなやつなんだろう。

なんで何も覚えていないんだろう。覚えているのは、ただ追われているという恐怖感だけだ。

私はもつと奥へと身を隠した。廊下は明るかったが、そのくぼみは影になっていて、じっとしていたら、見つからないかもしれないかもしれない。

ゴツ…。

何かが後ろの壁に当たった。私のスカートのポケットの中に何かがある。私は音をたてないように、静かにポケットからそれを出した。

ナイフ？折り返み式の果物ナイフだ。なんで、こんなものが。

用心のために持っていたのだろうか。私はナイフを開き、両手でギョツと握った。手はぶるぶると震え、唇までが震えだした。

寒かった。歯がガタガタ言うのだけは、必死で押さえた。

だが、手が震えるのは寒さだけではなかった。殺される前に、これで相手を刺そう。そう思うと、怖くて手が震えてくるのだ。

こんなナイフがいったい、何の役に立つんだろうか。わからないでも、刺して逃げだすことはできるかもしれない。

だけど、これ以上私は走れるのだろうか。足の裏は擦り剥けているし、寒さでかじかんでもいる。

カッーン！

カッーン！

足音がどんどん近づいてくる。

はあ……。恐怖で息が漏れた。

いけない！吐いた息が私を隠していた闇の中で、白くうずまいている。

「誰？」

男の声がした。

「誰がいるの？」

カッン。カッン。

足音が早くなり、どんどんこっちに近づいてくる。

ガタガタ。ナイフを持っている手が震える。

このまま勢いよく飛び出して、心臓めがけてナイフで刺そうか。

だけど、足が動かない。しゃがみこんだまましびれてしまい、足がどうにも動かない。

「そこに誰がいるの？」

来た！もう逃げられない！

「君、この靴の持ち主？」
男の手には私のパンプスがあった。

「どうしてこんなところにいるの？隠れているの？」
え？

「誰かに追われているの？」
……。私を殺しに来たやつじゃないの？

「この靴、君のじゃないの？」
私の……」

「立てる？」
その人は私の前にしゃがんだ。私は警戒して、後ろの壁にひっついた。

「……それ、危ないよ」
私の手に持っているナイフを見て、その人はそう言った。

ガタガタ……。私の手はまだ震えていた。
「わ、私を追って来たんじゃないの？」

「僕？いや、違うよ」
「……じゃ、じゃあ、あなた誰？」
「……君は？」

「私は……」
覚えていない。まったく、覚えていない。

この人の顔も覚えていない。でも、なんでだからわからないけど、この瞳は覚えがある。なぜだか、懐かしくて、あったかい優しい瞳だ。

「はい。靴、履いたほうがいいよ」

「…あ」

両手は固まり、ナイフをなかなか離せないでいると、その人が私の指からナイフを取ってくれた。

「危ないから閉まっておくね」

ナイフを折り畳み、その人は自分のポケットにナイフをしまった。それから、私の両腕をつかんで、立たせてくれた。

ふらふらしながら私は立ち上がり、どうにか靴を履いた。

「大丈夫？歩けそう？」

こっくりと、私はうなづいた。

「寒そうだね。これ、着たらいいよ」

その人は自分の上着を脱いで、私の肩にかけてくれた。そして私の肩を抱いて、ゆっくりと歩き出した。

「あなた、ここに住んでいる人ですか？」

「いや。違つよ」

「…じゃ、じゃあ、ここってどこか知っていますか？」

「…さあ」

え？

「それが、まったくわからないんだ」

男の人はまっすぐ前を向いて答えた。

「ここがどこか？」

「うん」

カッーン。カッーン。

その人の足音と私の足音が、廊下に鳴り響いた。他には何の音もないから、靴音だけが響き渡ってしまう。

「靴音を聞いて、あいつが来たらどうしよう」

「誰？」

「私を殺そうとした人……」

「殺しに？そんな危ない奴から逃げてたの？」

「……」

私は黙ってうなづいた。

「誰なの、そいつ」

「わからない」

「え？」

「わからないんです」

「何をして殺されそうになっているの？」

「それも、わからないの……」

その人は目を細めて私を見た。そして、下を向きたため息をついた。その人からも真っ白い息が漏れた。

「君もなんだね」

「え？」

「実は僕も……。記憶が全くない」

「え?!」

「なんでここに居るのかも。自分が誰なのかも……」

どういつことなの? 2人して記憶がないなんて……。

第2話 戦国時代の記憶

「いったい、ここはどこなんだろう。この高層マンションには人はいないのか…」

男の人はそう言うと、また私を抱え、ゆっくりと廊下を進んだ。

「あそのこの部屋だけ、電気がついてるね」
私がさつき、ドアを開けた部屋をその人は指差した。

「あの部屋、ドアに鍵もかかっていなかったの」

「え？」

「さつき、開けてみたの。玄関には靴もなくって、人の気配もしなかった」

「誰もいなかったの？」

「多分。なんだか、怖くて中には入らなかったから、わからないけど」

「そっか」

その人はゆっくりとその部屋へと進み、

「でも、開いてるのがここだけなら、とりあえずここで寒さをしのごうか」

とその部屋のドアを開けた。

ドアを開けると、やっぱり玄関には靴もなく、部屋の中は煌々と電気だけがついていた。

「本当に誰もいないみたいだね」

その人はそう言って、靴を脱いだ。それから、私が靴を脱ぐのを待って一緒に入った。

「こっちはリビングだ」

玄関からすぐのドアを開け、その人が中を覗いでそう言った。

「ソファもある。座らない？立っているのもやっつとでしょ？」

「うん」

その人に抱えられ、私はソファまで歩いて行き、ソファに座った。真っ黒の皮のソファはすごく柔らかく、私の体はソファに思い切り沈みこんだ。

ソファの前には透明なガラスのテーブルがあり、その上には何も置いていなかった。

ゆっくりと私は部屋を見回した。大きな窓にはブラインドがかかっていた。

部屋の隅には大きな観葉植物が置いてあり、天井には綺麗なシャンドリアが下がっていて、淡い暖色の光がリビング全体を照らしている。

リビングからダイニングもキッチンもつながっていて、ダイニングテーブルも黒く、椅子も黒かった。そしてやっぱり、ダイニングテーブルの上にも何も、置かれていなかった。

黒の家具だからか、壁の白さがやけに目立った。壁には一つだけ絵が飾られていたが、その絵の中には高層マンションが描かれていた。多分、このマンションの絵だろう。

「人が住んでいる感じじゃないね。ああ、あれだ。まるでモデルル

「ムだ」

男の人がそう言った。

私はようやく落ち着いてきて、その男の人の顔を見ることができた。黒い短い髪に、黒い瞳。顔はとても整っている。

「私たち、どこかで会ったことがあるのかな」

「え？」

「なんだか、見覚えがある気がするの」

「……」

その人も、私のことをじっと見た。

「君もそう感じてた？」

「あなたも？」

「うん。不思議と懐かしい。それに……」

「……？」

しばらくその人は、私を懐かしそうに見てから、

「僕がここにいるのは、君を守りに来たっていう気がしてならないんだ」

と話を続けた。

「守りに……？」

「なんで僕はここにいるのか。この街の中を歩きながらすごく不思議に思っていた。記憶がなくなったとしても、何か意味があつてここにいるんじゃないのかつて」

「……」

そんなことを考えながら歩いていたの？

「それで君を見つけて、なんとなくだけど、君を守るために僕はここに来たんじゃないかって、そんな気がしたんだ」

「…守るために？」

「そんな感じが君はしない？」

「私はよくわからない。でも、あなたのことを見て、やっぱり懐かしく感じた」

「僕と君は、知り合いだったのかな」

「…さあ」

その人は自分のズボンのポケットに手を入れて、中に入っていたものを取り出した。

「何か手がかりはないかと思って、さっきも上着やズボンのポケットの中を探したんだ。それで出てきたものは、この飴一個と、飴を包んでいた紙だけだったんだ」

その人はポケットから、飴玉と包み紙を取り出して、私に見せてくれた。

私も立ち上がり、自分のポケットの中を探った。

「あ…」

ポケットからはやっぱり、一個の飴玉と、包み紙が出てきた。

「おんなじ飴と、包み紙だ」

その人はそれを見て、そうつぶやいた。

「偶然？それとも、これにも何か意味があるの？」

「さあ、わからないけど、一つだけわかっているのは、あとは何にも手がかりがないってことだ」

「それと私が持っていたのは、果物ナイフよ」

「ああ。そうだったね。あとはポケットには何も入っていない？」

「ないわ。なんにも…」

私はまたソファに座った。

男の人は、キッチンに入って行った。そして冷蔵庫を開けたり、食器棚を開けたりしている。

「冷蔵庫、何にも入っていないよ」

「そう…」

それからその人はシンクの前に立ち、水道の蛇口をひねった。すると水がそこから、ジャー…と勢いよく流れだした。

「水は出るんだね」

そう言って、食器棚からコップを出して、その人は水を汲んでゴクゴクと飲んだ。

「うん。けっこう冷たいしうまい」

「私にもくれる？」

「ああ、持って行くよ」

新しくコップを出し、水を汲んでその人は、私の所に持ってきてくれた。

ゴクン…。本当だ。美味しい。

「はあ…」

やっと、生き返った気がする。

「玄関のドア、鍵を閉めてチェーンをかけてくるよ」

「うん」

その人がリビングから出て行ってから、私はしばらくソファの背もたれにぐったりともたれかかり、休んでいた。

ジャー……。水が勢いよく流れ落ちる音がする。ああ、もしかするとお風呂にお湯をためているのかもしれない。

その音を聞きながら、私はそのまま眠りについてしまったようだった。

ふわ……。体が一瞬間に浮いた。なんだろう。すごく気持ちがいい。そしてフワフワした雲の上に、乗った。

ここはどこだろう。

誰かの声が聞こえた。

「姫！」

ひめ？ひめって、姫のこと？

「姫……！」

叫び声は大きくなったり、小さくなったりしながら消えて行った。辺りには焼ける匂いや、煙が一面に広がり、息ができないくらいに苦しくなり、そして目が覚めた。

「ここは？」

フワフワしていたのはベッドだ。なんで私はベッドに寝ているのだろう。

ベッドの横のスタンドの、小さな電球だけが明かりを灯し、あとの電気は消えていた。

「そつだ。高層マンションの中だ。あの人と一緒に部屋に入って、

それから？」

私は布団をめくった。上着は脱いでいたが、ブラウスとスカートはちゃんと着ていた。

「そうだ。私、ソファでうたたねをして…」

もしかすると、あの人がここに運んでくれたの？

そつと私は部屋を出て、リビングに行った。リビングの明かりも消え真つ暗だし、ソファにも誰もいなかった。

リビングを出て、今いた部屋に戻りかけ、奥にもう一つ部屋があることに気がついた。

もしかして、あの人はここにいるのかしら。

トン…。小さくノックをした。返事はない。

私はそつとドアを開けてみた。

私が寝ていたようなベッドが置いてあり、その横のテーブルには、やはりスタンドが置いてあった。その小さな電球だけを灯し、ベッドにあの人がすやすやと寝ている姿が見えた。

「寝てる…」

私はちよつと安心した。彼が寝ているからじゃない。彼がここにちゃんといてくれたからだ。

ここで、彼に置いて行かれたら、私は一人で記憶もなくし、どこへ行ったらいいかも、何をしたいかもわからない。

それに、あの男に見つかってしまったら…。

また、もといた部屋に私は戻った。クローゼットを開けると、バ

スローブがかかってあり、私は服を脱いで、それに着替えた。
それからバスルームに行き中を覗くと、まだバスタブにはお湯が
はられたままだった。

「ガス、通ってるんだ」

私はお風呂のお湯を、また沸かしなおした。

その間体を洗い、髪を洗った。

そしてバスタブに入り、ゆったりとお湯につかった。

「ああ、生き返る」

体がやっと、あったまっていくな感じがした。

「それにしても、あの夢、なんだったのかしら。姫って呼ばれてた。
それになんとなく、昔の城の中みたいだった。大阪城とか、あんな
感じの……」

私とも聞いた世界ではないのは確かだ。どこからどう見ても、あ
れは戦国時代の光景だった。

「さすがに記憶はなくても、そんな時代に住んでいないのはわかる
わ」

独り言を言っつて、またゆっくりと首までお湯につかった。

ドライヤーはバスルームについていた。シャンプーからリンス、
石鹸までもがここにはある。ただし、誰かが使っていた形跡はなく、
すべてが新品だった。

トイレもちやんと使えるし、冷蔵庫に何も入ってないのと、全く
食べ物がないのだけが不便だったが、あとは生活するには便利など
ころでもあった。

ベッドにまた潜り込み、私は目を閉じた。ここがどこなんだかも、自分が誰なんだかも、誰に追われているのかもわからないというのに、そんな心配や不安よりも今は、ただただ眠りたかった。

きっと、体中が疲れ果て、考えることもしたくないくらいになっているんだ。

そんなことを思っているうちにどうやら、私は深い眠りへと落ちて行ったようだ。

「姫！楓姫！」

まただ。誰かが呼んでいる。ううん、泣き叫んでいる。誰？あなたは誰？楓姫って、私のこと？

「姫！どこにおられるのですか？」

私は「うん」。

「姫~~~~!!!!」

泣き叫ぶその人の声はどんどん、小さくなっていった。

私は自分が泣いていることに、起きてから気がついた。頬が涙で濡れている。

「なんの記憶？それともただの夢？ああ、もしかすると前に見た、ドラマか映画かもしれないな」

そんなことを思いながら、ベッドから私は出た。

寝室はカーテンがかけられていたが、そのカーテンとカーテンの隙間から、わずかな光が部屋に入り込んでいた。

「朝？」

カーテンをそっとめくり、外を見てみた。そこには大きな木が何

本が植えられ、あとは小さな庭のようなスペースがあった。庭は綺麗な緑の芝生で敷き詰められている。

トントン。ドアをノックする音がした。彼も起きたのかしら。

「はい」

「起きてる？」

「今起きたの。着替えてから、リビングに行くわ」

「うん、わかった」

その人の声は穏やかで、それだけでもほっとした。なぜ安心するのもわからない。彼がいったい誰で、なんでここにいるのかもわかっていないというのに。

だけど、彼が言うように、彼は私を守るためにここに来てくれたんじゃないかって、そう思えて仕方ないのだ。

昨日の服を着て、髪を簡単に整え、私は部屋を出た。化粧道具もないのだから、ほとんどノーメイクだ。

「おはよう」

リビングに行くと、彼はすごく優しい穏やかな表情で、そう挨拶をしてきた。

「おはよう。昨日、私のこと寝室に運んでくれた？」

「え？ああ。ここで寝るよりも、ベッドのほうが良く寝れるだろうと思って」

「ありがとう。でも、私重かったでしょ？」

「そんなことなかったよ」

その人は優しく微笑んだ。

「ねえ、あなたの名前なんだけど」

「僕の名前？昨日も言ったけど、記憶がないんだ。だから名前も思い出せない」

「ううん。それは私も同じ。ただ、ここでなんて呼んでいいか。2人だけで言い合えるあだ名でもいいの。考えない？」

「そうだね。君とかあなたじゃ、味気ないもんね」

そう言っつて、彼は考え出した。

「君も僕も、どっからどう見ても、日本人だね」

「日本語上手だしね？」

そう私が言っつと、彼はクスッて笑った。笑うと目じりが下がり、可愛い印象になるんだわ、この人っつて。

「そうだ。昨日、変な夢を見たんだ」

「どんな？」

「戦国時代にいた。僕はある姫を守る家来だった。その姫のことをきつと愛していて、その姫が戦に敗れ、城を焼かれてその中で死んでしまっつんだ」

え？その夢っつて。

「僕は最後まで姫を、燃え盛る炎の中で探した。姫の名前は楓姫だった」

やっぱり、同じ夢！

「一回だけ姫の声が聞こえた。小さな声だった。僕の名を呼んだん

だと思う。佐助って言った」

「サスケ？」

「猿飛佐助みたいだね。クス」

その人はまた笑った。笑顔がすごく人懐こくて、ひきこまれた。

「じゃあ、佐助って呼ぶわ」

「君のことは楓って呼べばいいかな」

「…私も同じ夢を見たの」

「え？」

「誰かが姫、楓姫って叫んでいた。辺りは一面、煙だった」

「…同じ夢？」

「それが私たちがいた世界ではないことは確かよね。この服装から見たって、戦国時代に生きていたとは思えないし」

「前世かな」

「え？」

「そついつの、信じる？」

「輪廻転生ってこと？」

「うん」

「……わからない。なにしろ、自分が誰かも思い出せないのに、前世のことまで考えられないもの」

「そつだよね……。でももし、前世があるとしたら、これで君と僕がつながっているのがわかったんじゃないかな」

「え？」

「僕はやっぱり、前世でもここでも、君を守る役目があるんだ」
「……」

「ただ、前世ではどうやら、守りきれなかったみたいだけどね」
その人は寂しそうに微笑んでそう言っていると、ソファアに深く腰掛けた。

「なんでそう思うの？」
私も彼の隣に座った。

「炎の中を探しても、姫を見つけれなかった。燃えた城の残骸の中から、姫の簪だけを僕は見つけた。僕は、守ることができなかった自分を呪った。そしてその簪で喉を突いて、自害した」
「……それも夢で見たの？」

「ああ。泣き叫び、姫のもとへ今行きますって言って、死んでいったよ」

「……」
ゴクン。それじゃ、もし今、私が追われているやつに殺されたら、この人、私を追って死ぬの？

「きっと、そんな前世があるから、今世では守りきる」
「……私を？」
「守り切ってみせるよ」

プワ……。リビングがいきなり、大きな和室になった。
目の前にはなぜか、着物を着ている佐助がいる。そして私も、着物を着ている。ああ、ここ、城の中の一室だ。

「姫……。私は命に代えても、あなたを守ります」

「佐助。どうか私のために、命を粗末にすることだけはしないで」
震える声で私は言った。佐助はそんな私を優しく見つめ、穏やかに微笑んだ。

次の瞬間、またそこはリビングに戻った。

「今の？」

「前世に一瞬、タイムスリップしたのかな」

佐助が私を懐かしそうに見ながら、そう言った。

第3話 中病院

私たちは、佐助と楓と呼び合うことにした。佐助はたまに私を姫と呼んだが、

「それ、やめてくれる？私には似合わないわ」

と私はその呼び方を嫌がった。

「そう？僕は姫のほうなんだか、しつくりとくるけどね」

「だけど、もし前世でそんな関係だったとしても、今世では違うわよ」

「…姫と家来じゃないってこと？」

「そうよ。それって昔のことだもの」

リビングでそんな話をしていると、どこからか車の音が聞こえてきた。

「今の聞こえた？楓」

「うん」

ドクン。まさか、あいつ？

「ちょっと見てくるから。楓はここから動かないで」

「気をつけてね」

「わかってる」

佐助は上着を着ると、そつと音も立てずに玄関のドアを開け、廊下に出て行った。

ドクン。もし、殺しに来た相手が、佐助のことも知っていて、佐

助を殺してしまつたら？

そんな悪いことが、頭の中をぐるぐるとめぐる。

たったの数時間一緒にいただけだ。なのに私は完全に佐助を好きになつていることに、もう自分でも気がついていた。理由などない。心が彼を好きだと言っているのだ。

私たちは、きつと恋人だつたんだ。結婚指輪をお互いしていないから、きつと恋人だ。

ガチャ。しばらくして佐助が戻ってきた。

「佐助！」

良かった。無事で！

私はソファアから飛び上がり、佐助に抱きつきそうになつたが、佐助の一步手前でその手を止めた。

恋人だつたと思つているのは、私の勝手な思い過ぎかもしれないし、佐助は私のことをどう思っているか、わからなかつたからだ。

「楓、この高層マンション街を抜けたところに、バス停があつた」

「え？」

「バスが来ていたよ」

「本当に？どこ行きのバス？」

「そこまでは見えなかつた。でも、行つてみないか」

私はすぐにコクンとうなづいた。

玄関のドアをそつと開け、辺りを見回してから佐助は私の手を引いてドアを閉めた。そして用心深く、音もたてないようにしながら、

私たちはゆつくりとエントランスに向かった。

管理人室は、やっぱり暗かった。誰も人がいないのは外から見てもすぐにわかった。

佐助はエントランスの外も、一回顔を出して見回すと、

「行こう」

と私の手を取り、歩き出した。

マンションを抜けてからは、佐助と走り出した。まだ足も昨日の痛みがあつて、早く走ることはできなかったが、それでも、気持ちがいそいでしまつて、歩いてなんていられなかった。

マンションの立ち並ぶ一角を過ぎると、大きな道路に面した道に、バス停があつた。

「あそこね」

「うん。次のバスが来るかもしれない。急ごう」

佐助は私の手を握つて、走りだした。

バス停には誰もいなかった。

「さつきも、誰もいなかったんだ。それにバスからは誰も降りた様子はないよ」

「不思議ね」

「なにが？」

「この道よ。ずっととまっすぐの道が続いているけど、私たちどこから来たのかしら」

「そうだね。そういえば、この高層マンションの一角以外は、近く

にビルらしい建物も見えないし、町もなさそうだ」

「私たち歩いてきたのかしら」

「覚えてないな。気がいたら、あの高層マンションの一角の入り口に立っていた」

同じだ。

「ねえ、なんで私たちは自分を示すようなものを持っていないのかしら」

「名刺とか？」

「携帯やお財布もよ」

「そうだね。持っていたのは飴玉だけだ」

「それも同じのを…」

私はどうやら、ここに来る前に飴をなめていたようだ。ここに来てからやけに喉が渴いていたが、口の中にほんのりと甘い味が残っていた。

私たちはバス停のベンチに座った。昨日の夜よりは寒さも厳しくなくて、震えながらバスを待つこともなかった。

バス停には時刻表はなかった。だから次のバスが何時に来るかもわからない。もしかすると今日はもう、来ないかもしれない。それでも、私たちはそこを動くことができなかった。

「ねえ、佐助」

「ん？」

佐助は私のことを見た。このやり取り、なんだか長年寄り添って

いる夫婦か、もしくは慣れ親しんでいる恋人のようなやり取りだ。

「佐助も私も、すっかりとした職業についていたんだって、そう思わない？」

「思うよ。僕が着ているスーツは、かなり高級品だ。楓のもそうみたいだよな」

「それに、佐助も私も黒いスーツ。黒の革靴と黒のパンプス。きつとお堅い仕事だわ」

「一緒の会社で働いていたのかな」

佐助はそう言うと、また道路のほうを見た。バスが来ないかどうかを確認しているようだ。

「ねえ、佐助」

「ん？」

また佐助は私のことを見た。

「なんで私は追われるようなことになったんだと思う？もし、真面目に働いていたとしたら、なんでかしら」

「うん。それは僕も考えたよ」

「推理してみたの？」

「うん。たとえば、かなり重大な何かを知ってしまったとか」

「重大な？」

「会社の裏取りとか？真面目に働いていそうだし、悪いことをしていたような雰囲気もないしね。僕たちは」

「…殺し屋にでも狙われているとか？」

「うん。一緒に逃げていたのかもしれないね」

「だから、同じ飴を持ってたのかしら。ねえ、この飴をなめたから、記憶が消えたってことはない？」

「飴で記憶を？」

「そう。考えられない？だって、共通するものは飴だけよ」

「そうだね。でも、一緒に逃げていたとしたら、どこかで飴を買って、それをなめていたとしてもおかしくはないんじゃない？」

「飴を？殺し屋から逃げているのに？」

「うん」

「考えられない。そんなこと…」

私はポケットから飴の包み紙を出した。包み紙には何も書いていないし、ただ水色に白のストライプ模様があるだけだった。

「ねえ、この残っている飴を食べたら、記憶が戻ったりして…。そう思わない？佐助」

私はポケットからもう一個の飴玉を取り出した。その包み紙はピンクに白のストライプだ。

「え？」

「食べてみようかしら」

「やめたほうがいいよ」

佐助はいきなり顔色を変えた。

「どうして？何か秘密でも知っているの？」

「いや、知らないよ。だけど、万が一、万が一のことだけど」

「うん」

「毒が入っているとしたら？」

「毒？」

ゾク…。そんなこと考えてもみなかった。

私は一気に怖くなり、飴をすぐにポケットにしまいこんだ。

「誰がそれを僕たちにくれたかもわからないし…。それにさ、こういふことも考えられるだろ？」

佐助は眉をひそめ、ちよつと小声になって話を続けた。

「僕たちは実は、スパイだった」

「え？」

「どこかの国の情報部員に、正体がばれて殺されそうになった」

「…まさか」

「で、この飴は、正体が捕まっていられないようにするための、つまり自害をするための飴だとしたら？」

「…」

そんなまるで、映画のような話があるわけがない。私はちよつと、佐助のことを引いて見た。

「まあ、信じられない話だろうけどね。だけど、100パー、あり得ないってことはないだろう？」

そう言っつて佐助はポケットから、飴と包み紙を取り出した。

「たとえば、この包み紙が包んでいた飴は記憶を忘れさせる薬がしこまれていた。それを僕らは同時に食べた。なぜか。それは相手に捕まっつて自白をできないようにするためだ」

「え？」

「なんてね。そんなことも考えてみたりしたんだ。だから、この飴はうかつに食べちゃダメだと思うよ」

佐助はまた飴と包み紙を、ポケットに入れた。

「……」

私はちよつとその推理、信じられなくもないなつて思つてしまつた。記憶をなくす飴。わざと私たちは同時に食べた？

ちよつと考えただけでも、つじつまが合つてしまつ。

誰も住んでいないと知つて、私たちはここに来た？ここに来たと同時に、飴を食べた？自分たちが何者かわかるようなものは、すべどこかに捨ててきた？敵にわかつたら身元がばれる可能性があるから。

なんか、頭の中を音楽が流れだした。ああ、ミッションポツシブルのテーマだ。

なんだつて、記憶喪失になつているのに、こんな音楽だけは記憶に残つているのだろう。

「今、頭の中、ミッションポツシブルの音楽が流れているわ」

私が佐助にそう言つと、

「僕はなぜか、ゴッドファーザーの音楽だよ」

と佐助は口元に笑みを浮かべ、そう言つた。

「ゴッドファーザーはスパイじゃないでしょ」

「ははは。そういう記憶だけはなんで、残つているんだろうね」

佐助は笑つた。

もしかすると、すぐそこに殺し屋は来ているかもしれないのに、私たちは呑気なものだ。昨日、ここに来た時は、本当に必死だったのに。これも、佐助がいてくれる安心からなんだろうな。

「あ、バスが来たよ」

佐助がベンチから立ち上がった。

「ねえ、でも、私たちお金も持ってないのに、乗れるの？」
「お金ならあるさ」

「え？」

「お札が数枚、上着の内ポケットに入っていたんだ」
「そうだったの」

バスは私たちの前でゆっくりと止まった。行先は『次世駅』と書かれていた。

「次世駅？」

まるで、来世のことでも言っているようだけど、そんな駅名の場所もあるのね。

私も佐助もあまりそのことは気にも留めず、バスに乗り込んだ。

運賃は後払いのようだ。運転手は私たちが乗り込み席に座ると、バスを発進させた。

「次はどこに着くのかしら」

「なんか食べるところがあればいいね。さすがに腹が減ったよ」
佐助はちよつと力なく、そう言った。

バスの中にも乗客は一人もいなかった。運転手は何も言わず、1

0分くらい走らせて、次の停留所でバスを止めた。

「降りてみる？」

佐助が言うので、私は降りた。

佐助は運転手にお札を渡し、細かい小銭でお釣りをもらってから、バスを降りてきた。

バス停のすぐ先には、大きな建物があつた。

「ここ、なんの建物？」

「なんだろうね、レストランが入っていたらいいんだけど」

佐助は私の手を取って、歩き出そうとしたが、私は佐助を引き留めた。

「佐助、ここ、病院だ」

「え？」

バス停に「中病院前」と書いてあるのが見えた。

「ああ、本当だ」

佐助もそれを見て、また大きな建物のほうを見た。

「病院の中にもレストランはあるさ。行ってみよう」

佐助は相当、お腹が空いているのかもしれない。私たちは手をつないで、大きな門をくぐり抜けた。

門から建物までは、結構な距離があつた。そこには多くの木が生えていて、人の姿はまったく見当たらなかつた。

建物の中に入った。入り口にも受け付けはなかつたし、廊下を歩いていても、誰にも会わなかつた。

「ここ、本当に病院かな」

佐助はそう言った。だが、確実に薬や消毒液の匂いだけはする。ただ、とても古そうな建物だ。天井の蛍光灯が消えかけているところもあった。

「階段がある。2階に行ってみよう」

佐助はそう言うと、また私の手を取って歩き出した。

2階には、廊下の両端にずらりと病室があった。廊下は暗くじめっとしていて、すべての病室はドアが閉まっていた。

やっぱり人の気配は感じられない。私はあきらめて一階におりようとした。

その時、佐助が私の手を引いて、

「いる。病室に人いるよ。楓」

と佐助はちよつと怯えながら、そう言った。

「え？」

佐助と私は、病室のドアにある小さな窓をそつと覗いて見た。すると、四つのベッドにすべて病人が寝ているのが見えた。

私たちが病室を覗いていると、寝ている患者さんがいつせいにこつちを見た。だが、その目はまるで死んでいるかのように、光を感じることができなかった。

「…っ」

いきなり、佐助は頭を押さえた。そしてよろよろと廊下を歩き、廊下の突き当たりにある長椅子に腰をおろした。

「気分悪いの？」

悪くなくても当たり前だ。あの病人の目、ものすごく怖かった。まるで死んだ人の目みたいだった。

「僕は、ここにいたことがある」

「え？どういうこと？」

「ここで、死んだことがあるんだ」

「それも、前世の記憶なの？」

「ああ、多分」

佐助は真っ青な顔をして、それからいきなり呼吸が荒くなった。

「大丈夫？佐助」

私は佐助の背中をさすった。さすりながら、こんなこと前にもあったと感じていた。

デジャブ？いや、違う。目の前の佐助がいきなり、パジャマ姿に変わった。

佐助は痩せていて、真っ白な顔色をしている。

「佐助、大丈夫？病室戻る？」

私は必死で佐助の背中をさすっている。

「楓、僕は死にたくない」

「佐助。変なこと言わないで。あなたは死んだりしない」

「…君を残して死ねない」

「そうよ。死んじゃ駄目。私を悲しませないで」

「…楓」

私は佐助を抱きしめた。佐助は私の腕の中で、肩を震わせ泣いていた。

ギユ。佐助を抱きしめ、目を閉じた。佐助が死を怖がっているのを感じ、死なないで！と心で叫びながら私も泣いた。

しばらく2人で抱きしめあい、泣いていた。それから何分たっただろう。目を開けると、スーツ姿の佐助がいた。

「今の…」

「タイムスリップかな、また」

佐助がそう言って、私の頬につたっていた涙を優しく拭いた。

「僕はもう大丈夫だよ。楓」

佐助はそう言うと私の手を取って椅子から立ち上がり、廊下を歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331y/>

最後の輪廻

2011年12月9日01時04分発行